

一 次の文章を読み、後の各問いに答えなさい。

スーパーマーケットへ買い物に行った際に、^①そこに並ぶ野菜や果物の美しさには驚かずにはいられない。まるでプラスチック製品ではないかと思えるほどに形が整い、つやつやしている。野菜や果物などをいくらかでも自分で作ったことのある人ならすぐにわかるだろうが、こうした形の整った傷のない作物を作るには、じつに手間がかかるものだ。害虫による被害も大きく、ちょっと気がつかないうちに丹精をこめて作ってきた作物が、あつという間にだめになってしまう。^A、スーパーに並んでいるような作物を作りだすためには、多くの資源と労力の投入が欠かせない。

もつとも、ほとんどの人はそこまで考えることはないのかもしれない。そしてたまに形の悪いでこぼこの野菜などを見ると、「だれがいったいこんなものを買うんだろう」そう思いながら、できるだけ見栄えのいい、すべすべの野菜のほうをカゴに入れる（私もそうする）。

害虫を防除するためにはいくつもの方法があるが、もつとも一般的なものに農薬の使用がある。スーパーにプラスチック製品のような作物が並ぶということは、農薬によって多数の昆虫が殺され、排除されてきたということでもある。農薬の種類によっては、同時に害虫を食べる天敵もずいぶんと殺されたことだろうし、それ以外にも膨大な数の昆虫が、農薬散布の巻き添えで死んだことだろう。人間一人あたり毎日毎日どれくらいの数の昆虫が農薬で殺されているのか、ちょっと想像もつかない。

農薬の使用は、昆虫を殺して見栄えのいい作物を作りだすことにより、見た目を重視する傾向をどんどん加速させていく。ともかくも、まずは

ないなど、一般的にはより多くの労力と金がかかる。

^④ 農薬は麻薬に似ている。農薬使用によって支えられてきた日本農業、そして世界の農業において、そもそも単一な作物を農業も使わずに広範囲に作ったとき、害虫も病気もまったく発生しないなどということは、普通ありえない。

本来農薬は見栄えのいい作物を作るためではなく、害虫から作物を守り、生産性を高め、食料を確保するという役目を持っていた。それこそが農薬の使命だったはずだ。何もプラスチック製品のような作物をめざしていたわけではない。^E、口に入る作物ができればよかったのだ。そしてそれが達成されたときに、スーパーに並んでいるプラスチック製品のような作物たちが出現した。こうしたことは、農業以外の分野においても起こると考えていい。最初は人間の生存率を高めるためのものだったものが、もつと別の目的、見栄えだとか楽しみのために使用されたのは、ごく普通のことだ。そういうものはいま、どれくらいあるだろう。というよりも、そうでないものがいま、いったいどれくらいあるだろう。^⑤ 必要最低限のレベルでとどまっているものなど、どれほどあるのだろう。

ある対象が作りだされた当初の目的は、それが達成されるや否や、あまりにも当然のこととして意識されなくなり、その代わりにさまざまな機能の追加が大きな目的のひとつとなっていく。そしてそれらを作りだし、利用するために消費されるエネルギーも、どんどん増加していく。消費エネルギーを減らす技術も開発されているが、すでに世界全体でのエネルギー消費量は、一八六〇年から二〇〇〇年の間で一〇〇倍にも増大しているといわれている。仮にいまと同じ生活水準を維持する場合、エネルギーの利用効率を上げることができれば消費エネルギーの増加量

見た目がきれいではなくてはならないのだ。

見た目がきれいなものを選ぶことには腐敗したものを避ける効果があるため、かつて、^②それは十分な意味を持っていた。ただ、見た目がきれいなものを買う手が選ぶ傾向が強まると、衛生的には問題なくとも、見栄えが悪いというだけで店頭に並ばなくなってくる。あつさり捨てられてしまうことはないだろうが、見栄えが悪いというだけで商品価値はなはだしく低下し、これが作物の見栄えのよさへの努力をさらに加速させ、栄養的には意味のないところへ多くのエネルギーを注ぎ込ませることになる。そのエネルギーのつけは、人間だけでなく、昆虫を含む他の生物にもまわされるだろう。

だからといって、見栄えの悪いものも選ぶよう消費者に強制するのはむずかしい。人間の遺伝的命令の中に、「目の前にある作物のうち、病原菌などがついていないさそうな、なるべく見かけのきれいな作物を選べ」という指令が入っているからだ。^B、作物栽培に消費されるエネルギーを少なくしようとするなら、見かけのきれいな作物と悪い作物とを同時に並べてはいけない。見かけの悪い作物だけを並べるしかないのだ。

^C、「見かけは悪いけれど、この野菜には農薬を使っていない」と謳^{うた}って、見かけの悪さを無農薬の重みづけで補おうとする場合もある。^D、現在ある作物品種を本当にたった一度も農薬を使わずに作ることはむずかしい。もちろん、無農薬で作るに越したことはないが、「無農薬」への礼賛^{※らいさん}が生産現場にもたらす「無農薬をめざすこと」によって生じる多大なエネルギー消費^③を思うとき、私は暗い気持ちにならざるを得ない。農薬を使う農業にはもちろん金がかかるが、農薬を使わない農業には、薬剤防除の代わりに手作業での防除をしなくてはなら

をある程度抑^{おさ}えることは可能だが、現在の水準を大きく下まわるようにするのは、いまの技術水準では不可能だ。また、^⑥さまざまな付加機能のついた商品よりも、きわめてかぎられた能力しかない商品を買わせようとすることも、見栄えの悪い作物を買わせようとすることに似て、多くの場合、不可能と考えたほうがいい。

最後につけ加えておけば、現在の農薬は人体への影響をできるだけ抑えるよう、日々改良が進められている。農薬であることを示すために、どぎつい色や不快な臭いがわざと添加されていることもあるが、なかには人間に対してほとんど毒性が認められない農薬も多い。農薬を一方的に嫌うことは、エネルギー効果の面から見ても好ましいこととは思えない。

（高橋敬一『昆虫にとってコンビニとは何か』より 一部改変）

※礼賛：すばらしいとほめたたえること。

問1 ^①「そこに並ぶ野菜や果物の美しさには驚かずにはいられない」とありますが、筆者がこのような感情を抱くのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次のア～エから選びなさい。

ア 本来なら甚大な^{じんだい}労力と資源が必要な形の整った野菜が、平然と並んでいるから。

イ 大量に農薬を使用している農作物が、何のためらいもなく商品として陳列されているから。

ウ 現代人は、その背景にある生産の苦労を顧みることなく、大量に野菜を消費しているから。

エ スーパーに並ぶ異様なほど美しい野菜は、現代人の病的な^{けつぺき}潔癖の証だから。

問2 ②——「それは十分な意味を持っていた」とありますが、なぜですか。「生存率」「選別」という語を用いて五十字以内で説明しなさい。

問3 ③——「私は暗い気持ちにならざるを得ない」とありますが、なぜですか。その理由として最もふさわしいものを次のア～エから選びなさい。

ア 農薬を使用しないことが理想ではあるが、無農薬はかえって多大な労力が必要になってしまうから。

イ 無農薬のほうが健康的だとは分かっているが、経済優先の現代社会では、農薬の使用を止められないから。

ウ 無農薬は環境に優しいと思い込んでいる現代人は、その背景にある莫大な資源の浪費を顧みようとしないから。

エ 無農薬は経済効果にも配慮した理想的なあり方だが、生産現場では多くの人の労力が投入されているから。

問4 ④——「農薬は麻薬に似ている」とありますが、これはどのようなことですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選びなさい。

ア 生産現場で長年使用されている点が、長期間効果が持続する「麻薬」に似ているということ。

イ 少量でも絶大な効果をもたらすという点が、刺激の強い「麻薬」に似ているということ。

ウ いつの間にかその効用を忘れさせてしまうという点が、感覚を麻痺させる「麻薬」に似ているということ。

エ 害虫だけではなく、害虫を食べるはずの天敵さえも殺している農薬もある。

オ 地球環境や人間の健康を考慮するうえで、効率よく無農薬栽培をすることが求められる。

問9 本文中で述べられている「プラスチックのように美しい作物」と同じ性質を持つものにはAを、そうでないものにはBを、それぞれ答えなさい。なお、すべて同じ記号を答えた場合は採点の対象としません。

ア 頑丈で長持ちしそうなものより、着古したように穴のあいたものの方が好まれる若者のジーンズ。

イ 新幹線「ひかり」ではその速度に満足できず、さらに速い速度を求めて開発された新幹線「のぞみ」。

ウ 飼い猫がすぐに庭に逃げってしまうので、首輪を柱につないで、その行動の自由を奪った飼い主。

エ 通話やメールといった通信機能だけではなく、さまざまな娯楽的機能が付加されている、今日の携帯電話。

オ 背を高く見せようとするために、さらにかかとを高くする女性のハイヒール。

問10 文中のA E にあてはまるものとして、最もふさわしいものを次のア～オから選びなさい。ただし、各選択肢は一回しか使えません。

ア ときには イ けれども ウ もし
エ ともかくも オ そのため

エ 一度使いだすと使用を止めることが困難な点が、中毒性のある「麻薬」に似ているということ。

問5 ⑤——「必要最低限のレベル」とありますが、「農薬」において「必要最低限のレベル」とはどのようなものですか。「レベル」に続くように、文中から二十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問6 ⑥——「さまざまな付加機能のついた不可能と考えたほうがいい」とありますが、「商品」と「作物」を対比した場合、「作物」にとっての「付加機能」とは何にあたりますか。五字程度で答えなさい。

問7 次の文は、文中のある段落の末尾に入ります。どこに入れるのが最もふさわしいですか。その直前の五字を書き抜きなさい。

これは農薬は有害である、という認識から出発している。

問8 筆者の主張に合致するものを次のア～オから二つ選びなさい。

ア 農薬を無条件に嫌う考え方は、かえってエネルギーの有効活用的一面では弊害となりうる。

イ 農薬は、エネルギー効率の面では有効に機能するため、ぜひとも積極的に使用すべきである。

ウ 現在使用されている農薬は毒性がないため、農薬を嫌うことは一種の迷信のようなものである。

二 次の文章を読み、後の各問いに答えなさい。

① 校庭は野球部とサッカー部と陸上部が三分の一ずつ使っている。このうち、サッカー部のやつらとは顔を合わせたくない。サッカーコートから顔をそむけながら走ることになる。本当に、なんでこんなことになってしまったんだろう。

ぼくは小学校のとき、サッカー部に入っていた。自分で言うのもなんだけれど、足が速かったし、※ドリブルやフエイントが得意だったので、※フォワードとしてけっこう活躍していたのだ。美里北小の長谷川優太の名前は、同じ村の美里南小のやつらにはもちろん、よく練習試合をしていた海王市の小学校のサッカー部にまで知れわたっていた。

中学に進んでからは、迷わずサッカー部に入った。ちょうどそのころ、自分でもびっくりするほど身長が伸びたので、これからはきつと当たり負けしなくなるだろうし、足だってもっと早くなるだろうと楽しみにしていた。ところがだ。なぜかわからないが、急にサッカーがへたくそになった。ボールを蹴るという簡単なことさえ、きちんとできなくなった。まるで、両足が自分のものではないかのような感覚だった。ボールに足が触れるその一瞬、奇妙なタイミングのズレがあったのだ。

でもこの感覚をわかってくれる人は、周りに誰もいなかった。

「とにかく努力が足りないんだよ」

サッカー部の顧問の先生に、①いらいらした口調で言われた。努力だとか根性だとか全力だとかの言葉をすぐに持ち出すこわいオッサンで、ぼくの小学校時代の活躍を知っているだけに、期待はずれとがっかりしているようだった。ぼくだって悔しくて努力はした。以前よりたくさん練習した。

も殴りかかりそうだ。対照的に、姫はへらへらと笑っている。

「そんなに深い意味があつてやったわけじゃないですよ。ちょっとかつこいかなあつて思つて」

姫が笑いながら髪をかき上げた。耳があらわになって、耳たぶに赤いピアスが見えた。

「岡本。あのとき、おれがどんなに大変な思いをして水泳部を残したと思ふ？」

ぼくらが一年生のときのことだ。美里中水泳部の三年生が、海王市にある海王中の水泳部にけんかを吹っかける事件があった。しかも、水泳大会が開かれていた最中だ。

三年生と二年生は全員退部となり、水泳部は廃部が決定的になった。しかし、そこでウガジンがひとり廃部に反対した。理由は一年生だからとけんかに置いてけぼりになった姫が、小さいころから海王市のスイミングクラブに通い、たくさん記録を打ち立ててきた将来有望な選手だったからだ。その姫のために、水泳部を存続させようとがんばったのだ。

そして、そのウガジンの思いは見事に実った。姫はいまや二百メートル自由形の県中学記録を保持している。一分五十九秒三五。本当にすごい記録なのだ。

姫は困ったような笑みを浮かべた。

「おれだって先生には感謝してますよ。水泳しか取り柄がないおれなんかのために、水泳部を残してくれて。でも、それと、これとは関係ないじゃないですか。」

ウガジンは眼をつぶって首を振った。

「わかった。岡本の気持ちがよくわかったよ。学校にはピアスのことは

けれども、ぜんぜんうまくならなかった。ぼくはフォワードの練習メンバーからはずされた。

※ディフェンダーへのポジションチェンジを言い渡された。屈辱だった。

「体力が落ちてきて、足腰がついてこないんだろ」

顧問の先生にそう叱られて、ドリブルの練習を大幅に増やした。練習量は前に比べて三倍くらいになった。

しかし、夏休みのある日のことだ。左膝が痛くなって動けなくなってしまった。感電したみたいにビビッと鋭い痛みが膝から全身に走って、呼吸さえできない状態だった。無理に体を痛めつけすぎて膝を壊してしまったのだ。訪ねていった整形外科の先生からは、運動は当分しないように止められてしまった。最低でも三ヶ月の休部が必要だと言われた。

② ぼくはサッカー部をやめた。膝はいつか治るかもしれない。復帰できないことはない。しかし、サッカーに挑戦する気持ちをなくしてしまったのだ。大好きで、あんなにも得意だったサッカーで、わざわざ負けを認めるためにサッカー部に戻るのはいやだ。だから、ぼくはまだまだ膝が悪いふりをして、誰とも勝負をしないで中学生生活を終えることにした。いまでも左足にはサポーターを巻いたままだ。体育の授業もほとんど見学している。お昼休みのサッカーやバスケットにも参加しない。水泳部の練習もゆるゆると泳いでいるだけ。

②「いったいおまえは、どういうつもりでそんなことをしてるんだ！」

プールの入口まで戻ると、※ウガジンの怒鳴り声が聞こえた。

おそろおそろプールのサイドに行ってみると、ウガジンと姫が間近で向かい合っていた。

ウガジンは怒りの形相だ。両手を腰のあたりでぎゅっと握り、いまに

黙っておいてやる。だけどな、岡本。おまえ、水泳部はクビだ」

重苦しい沈黙に包まれた。

「おまえは泳ぐことにかけて本当に才能があるよ。でもな、いくら才能があつても、③心がついてこない人間をおれは認めない」

とどめの一撃だと思った。ぼくは必死にプールのサイドのコンクリートを見つめ続けた。すると、ウガジンはぼくらのわきを通って校舎へと戻っていった。

姫は平然としている。

「ほんとにやめるつもりなのか」

「そうだよ」

「姫は県の記録保持者じゃないか。勝手にやめていいのかよ」

「記録なんて」

「なあ、姫。もうちょっとよく考えたほうがいいよ。いまからウガジンのところへ行けばまだ間に合うよ。いままでウガジンにどれだけ大切にされてたか、姫もわかっているだろ」

「もういいんだって」

「なんでだよ。どういう意味だよ」

問い詰めると姫は少しもったいぶってから言った。

「実はおれ、海王のスイミングクラブもやめたんだ。でもさ、泳ぐことが嫌いになったわけじゃないぜ。たださ、泳いでるときだけ人に認めてもらう感じがもういやなんだよ。泳いでないと価値がない人間なのかなって疑問に思っちゃってさ」

「姫……」

④ 気持ちがわからないでもなかった。

サッカーがへたになったとき、それまでぼくをちやはやと褒め称えていた周りのやつらがいきなり離れていった。親友だと思っていたやつまで、ぼくに勝てるとうかつた途端、急に態度が冷たくなった。そして、膝を痛めてからは最悪だった。いらいらして、気持ちが悪き込んで、周りがみんな敵に見えるようになって、気づいたらひとりぼっちになっていた。完全に孤立していたのだ。

孤立したのはそれまでぼくが天狗になっていて、周りのサッカー部員を少しばかり見下していたせいもあっただろう。それは認める。けども、いくらなんでもみんな簡単に手のひらを返しすぎだ。そんなにもぼくはサッカーをすることでしか評価されない人間だったのだろうか。

この後、姫が水泳部に復帰する条件として、水泳部は※トライアスロン大会に出場することになる。出場人数を揃えるために、幼なじみの美月が優太への説得を試みるが、優太は断ってしまう。

③「※ランパートは誰か頼むあてがあるの」

「わたし」

美月は⑤強く短く答えた。

「美月？」

「そう。わたしが出るの。だって男子が出てても女子が出ててもどっちでもいいんでしょ」

「本気？ 五キロも走るんだよ」

「大変だけど大丈夫だよ。わたしだってバスケット部でけっこう走ってるんだから。それに暁くんは言ってたよ。別に優勝しなくてもいいんだって。」

きつていて、走ったあとには白い土ぼこりが巻き上がる。

真剣に走るのとは二年ぶりだ。すぐに息が上がって、横っ腹が痛くなった。筋肉が落ちていて足がなかなか前に進まない。けれども、体はよるこんでいる。もっともずっと動こうぜ、とぼくに呼びかけてくる。

なぜぼくはもっと早くから走ろうとしなかったんだろう。膝はぜんぜん痛くない。とつくに完治していた。痛ければいいな、と願いつけて無駄な時間を過ごしてしまった。⑦痛いふりで手に入れた平穏な毎日、たしかにぼくを傷つけなかったけれど、きつとそのあいだにたくさんの可能性を捨ててしまったにちがいない。

最初は軽く走ってそのまま終わりにするつもりだった。でも、走り込むうちに自然とスピードが上がってきた。うまく言葉にできないけれど、体自身がもっと自分を試したがっている。もう少し早く走れるんじゃないか。もっと速く、もっと速く。ぼくは両手を思いっきり振って、めいっぱい地面を蹴って走った。

ラストスパートだ。息を止めて、体の中のすべてをしほり出すようにして、ゴールを駆け抜けた。空がとても広く感じられる。入道雲がきらきらと光って見える。どこへでも飛んでいける羽なんていらなないかもしれない。こんなにも軽やかに走れる足が、ぼくにはあると知ってしまったいまは。

朝礼台に寝転がって息を整えた。疲れたけど気持ちがいい。ランパートに出るように説得しに来てくれた美月に、ありがとうと抱きつきたい気分だ。

⑤「おい、優太」

呼びかけられてどきりとした。ゆっくりと体を起こす。C組の猫田だった。サッカー部でいっしょだったやつだ。

「やあ」

それなら、わたしだっていいでしょ」

「姫に頼まれたのか」

美月は大きく首を振った。

「わたしが参加すれば暁くんが水泳部に戻れるんだよ。それでいいじゃない」

⑥すぐくショックだった。笑顔で語る美月を見ながら、どんどん自己嫌悪に陥っていった。姫が好きで、姫のために走ろうと決める美月にくらべて、ぼくはなんてちっぽけなんだろう。好きな人のためにがんばろうとしている彼女が、健気で、美しく見えた。同い年の女の子なのにかっこよく生きているように思えた。

その横顔を眺めながら、ぼくは思った。このままかっこ悪い自分であるのはいやだ。小学校六年生の長谷川優太のほうが、ぼくよりずっと先を走っている気がする。まだ小学生のぼくの背中を、いまのぼくが追いかけている。それほど、いまのぼくはすべてにおいて情けない。かつての自分にも勝つことができない。

ぼくは変わりたい。三年前のほうがかっこよかったなんて言われる男から変わりたい。実際にいま膝がどんな状態なのかわからないけれど、美月と一緒に中学にいるあいだに、一度でいいから全力で走っておきたい。そうでないと、彼女を好きでいる資格さえないように思えた。

「走るよ」

美月の視線がぼくにそそがれる。

「ランパートに出るよ」

④校庭を大回りして走った。フェンス沿いに並ぶ桜の樹の下に行く。空には容赦なく光と熱をまき散らしている七月の太陽がいる。校庭の地面は乾き

弱々しい返事になる。逃げるようにサッカー部をやめたときから、サッカー部員に負い目を感じてしまう。嘘つきと見られているように思えてしまうのだ。

「元氣じゃないの。思いつきり走っちゃってさ」

猫田がにやにやと笑いかけてくる。⑧思わずぼくは自分の左膝に手を当てる。

いや、まだまだ膝が悪いけど、いやなことがあったから、やけになって走ってみようかな、なんて。

そんな言い訳が頭に思い浮かんだ。しかし、膝から手を放して、はっきりと答えた。

「膝はもう治ったんだ。思いつきり走れるんだよ」

猫田がⅠ顔をやる。

「そうなのか」

「もうばっちり」

左膝をばんばんとはたいて見せると、猫田はⅡ腕組みをした。猫田はぼくがフォワードからディフェンダーに回されたとき、逆にフォワードに抜擢されたやつだ。ぼくがサッカー部を退部するときに、ライバルが減るからとやけにはしゃいでいたのも知っている。

「じゃあ、サッカー部に戻ってくるのかよ」

ふてくされた口調で猫田が聞いてくる。

「戻らないよ。いま戻ってもおまえらレギュラーにはかなわないし、足を引っ張るだけだからさ」

「そ、そうだよな」

猫田がⅢ笑い、べらべらと続けた。

「いま優太が戻ってきてても、そう簡単にまた元のレベルにまでうまくなるのは難しいもんな。それに、おれたち三年だってこの夏が終われば引退だし」

「そうだな」
なぜか心に余裕があった。しっかりと負けを認める強さが、自分にはあるのだとうれしくなったくらいだ。

サッカーのゴールからそれたボールが、こちらに転がってきた。それに気づいた猫田が、※ インサイドでトラップする。

「じゃあ、おれ、もう行くよ」

猫田はボールをグラウンドに蹴り返す。走っていかうとする猫田を脅してやる。

「勝負は高校に入ってからだよ。もし敵だったら目にも見せてやるぜ」
「わ、わかったよ」

走り去る猫田を見送りながら、何度も自分で言った言葉を噛みしめた。勝負は高校に入ってから。

今のぼくにはその言葉が、強がりでも、遠い希望でもなく、やがて来るほんとの未来として感じられた。

(関口尚『空をつかむまで』より 一部改変)

※ドリブル、フェイント…サッカーの技の名称。

※フォワード…サッカーのポジションの名称。主に得点を入れる役割をになう。

※ディフェンダー…主に自陣で相手チームの得点を阻止する役割をになう。

※ウガジン…水泳部の先生。

※姫…岡本暁人のニックネーム。

※トライアスロン…スイム(水泳)・バイク(自転車)・ラン(マラソン)の

ウ 身体を壊したことで、無理を強いた顧問への信頼が絶望へと変わっている。

エ 医者に止められたことで、不調であったサッカーに見切りをつけている。

問3 ③——「心がついてこない人間」とありますが、これは先生にとつてどのような人間を指すのですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選びなさい。

ア 事件を起こした先輩たちと同じような不良に身を落とす人間。

イ 期待をかけて育ててくれた恩師に対し、反抗ともとれる行為をする人間。

ウ 水泳しか取り柄がないなどと自分を卑下し、ふてくされている人間。

エ 見た目ばかり派手になり、水泳を真剣にやらない浮ついた人間。

問4 ④——「気持ちが変わらないでもなかった」とありますが、このように思うのは、「ぼく」が自分と「姫」にどのような共通点を見つけたからですか。答えとして最もふさわしいものを次のア～エから選びなさい。

ア スポーツは好きだが、まわりの過剰な期待がプレッシャーになり、積極的に取り組むことができなくなっている点。

イ 大きな期待をかけておきながら、それが裏切られたとたんに態度を変える人々に不信感を抱いている点。

ウ 活躍を認めてくれていた人々の気持ちに応じることなく、自分の

三つのパートを融合した競技。この大会は三人の選手がそれぞれのパートを担当するリレー形式で行われる。

※ランパート…トライアスロンにおけるマラソン競技のパート(部分)。

※インサイドでトラップする…転がってきたボールを足の内側で止める技。

問1 ①——「いらいらした口調」とありますが、その原因を説明した文として最もふさわしいものを次のア～エの中から選びなさい。

ア 期待したほどの優れた技術を持っていないにもかかわらず、「ぼく」は自分の能力を過信して練習を怠けているのだと考えたから。

イ 小学生時代の「ぼく」のレベルから、将来有望な名選手になると期待をかけていたことが裏切られて憤りを感じているから。

ウ 顧問である自分とそりが合わないために、「ぼく」の高い技術が十分に発揮されないことに対して歯がゆさを感じているから。

エ 「ぼく」をチームが強くなるために必要な選手だと期待をかけて育てていたぶん、伸び悩む技術力と反抗的な態度に落胆を隠せないから。

問2 ②——「ぼくはサッカー部をやめた」とありますが、この時の「ぼく」の様子を説明した文として最もふさわしいものを次のア～エから選びなさい。

ア 顧問にサッカーに対する誇りを傷つけられたことで、情熱をなくしてしまっている。

イ 身体的、時間的に不利な立場に立ったことで、今以上にプライドが傷つくことを恐れている。

都合でやめることに本当は罪悪感を抱いている点。

エ スポーツで活躍することが、自分の存在を示す唯一の方法であることに虚しさと不安を感じている点。

問5 ⑤——「強く短く答えた」とありますが、この態度からわかる「美月」の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～エから選びなさい。

ア 三年前に比べてすっかり変わってしまった「優太」への落胆。

イ 女子であろうと男子と互角に勝負してみせるという自信。

ウ 「優太」が出ないために自分が出るのだということの強調。

エ 自分が必ず「姫」の復帰の条件を満たすのだという決意。

問6 ⑥——「笑顔で語る美月を見ながら、どんどん自己嫌悪に陥っていた」とありますが、これは「ぼく」が自分と「美月」との間にどのような違いを見出したからですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選びなさい。

ア 「美月」が好きな人のためにがんばっているのに対し、「ぼく」は好きな「美月」のために何もしていないという違い。

イ 「美月」が自分にできることを必死でやろうとしているのに対し、「ぼく」は挑戦もしないで逃げているという違い。

ウ 「美月」が未来の夢に挑戦を試みているのに対し、「ぼく」は過去にばかり気をとられているという違い。

エ 「美月」がバスケット以外のスポーツで勝負するのにに対し、「ぼく」はサッカーさえまともにやろうとしないという違い。

問7 ⑦——「痛いふりで、傷つけなかった」とありますが、「ぼく」は「痛いふり」をすることでのどのようなことに傷つかずにすんだのですか。その内容を説明した次の文章の空欄に合うように本中より五字前後で書き抜きなさい。

サッカーで（五字前後）こと。

問8 ⑧——「思わずぼくは自分の左膝に手を当てた」とありますが、この行動は「ぼく」のどのような心理を表していると考えられますか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選びなさい。
ア 負い目を感じている相手に遭遇した事で、無意識のうちにまた左膝の怪我を言い訳に逃げ出しそうになっている。
イ 自分のポジションを奪った相手の嘲笑によって、左膝が治った今も勝つことができないかもしれないと不安になっている。
ウ 猫田のうす笑いの対象が自分の左膝であることがわかり、隠すことによって、怪我について追及されることを避けようとしている。
エ 嘘や言い訳の象徴となっている左膝を手で覆うことによって、また嘘をつきそうになる自分の弱さを絶とうとしている。

問9 ⑤段落について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「ぼく」の気持ちに大きな変化が起こっていることが彼の動作からはっきりとわかる一文を文中より抜き出し、初めの五字を答えなさい。

三 次の各問いに答えなさい。

(1) 次の四字熟語の意味を参考にして、（ ）にあてはまる漢字二字を答えなさい。

- ① 一期（ ）……一生に一度しかない出会いなど、めったにないというたとえ。
② （ ） 風月……自然界の美しい風物のたとえ。
③ 呉越（ ）……仲の悪いもの同士が、たまたま同じ場所に居合わせること。
④ （ ） 十色……人はそれぞれみな異なることのたとえ。
⑤ 馬耳（ ）……人の意見はいつさい耳に貸さず、聞き流すこと。
⑥ 無我（ ）……何かに心をうばわれ、我を忘れるほど物事に打ち込むこと。

(2) 例にならって、次の条件にあてはまる漢字を答えなさい。

例 「したところ」に「ノウ」と書き、「タイ」と読む。 ↓ 態

- ① 「うかんむり」に「まつり」と書き、「サツ」と読む。
② 「まだれ」に「くるま」と書き、「コ」と読む。
③ 「さんずい」に「はら」と書き、「ゲン」と読む。
④ 「おおざと」に「クン」と書き、「ゲン」と読む。
⑤ 「うしへん」に「てら」と書き、「トク」と読む。
⑥ 「おおがい」に「キヤク」と書き、「ガク」と読む。

(2) (1)の気持ちの変化を、「ぼく」は今後どのような行為で示していくと考えられますか。四十字以内で説明しなさい。

問10 本文の表現上の特色について説明した文として、正しいものを次のア～オから二つ選びなさい。

ア 会話を多く用いることで「ぼく」たちの悩みを乗り越えて成長する姿を生き生きと描き出し、その素晴らしさを伝えている。
イ 擬人法や比喩などの表現技法を用いた描写を多用し、短い文の連続によって思春期の複雑な心情をテンポよく表現している。
ウ 読者にとって親しみやすい語り口調で話が展開していくことで、現代の中学生の気持ちをうまく描き出している。
エ それぞれの登場人物が思春期特有の悩みを抱えているという設定にすることで、読者がどの人物にも感情移入しやすいよう工夫がなされている。
オ 過去の回想と現在をおりまぜながら話が展開していくことで、「ぼく」の変化が時間経過とともに効果的に描き出されている。

問11 I II III Ⅳ にあてはまる猫田の様子として最もふさわしい組み合わせを次のア～エから選びなさい。

ア (I くやしそうな II 腹立たしそうに III 楽しむように)
イ (I 驚いたような II 嬉しそうに III バツが悪そうに)
ウ (I 意外そうな II 残念そうに III ほっとしたように)
エ (I 泣き出しそうな II 寂しそうに III 満足したように)

四 次の傍線部の漢字には読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 子どもが健やかに育つには環境も大切だ。
② 的にめがけて投げるが、すべて外れた。
③ 彼は近代の絵画についてはくわしい。
④ 熱が高いので解熱薬をのむ。
⑤ せっかく釣りに行つたのに釣れたのは雑魚ばかりだ。
⑥ 津波の被害があつた地域のアンピが心配だ。
⑦ 古い校舎のカイシユウ工事が始まつた。
⑧ 学年集会でトウロン会を開く。
⑨ 細かな部分の話はハブいて全体像を明らかにする。
⑩ 上司の判断にソムいて失敗してしまつた。